

分節された世界で「作る」ということ

——菊池遼の作品を通じて——

私たちがいま目の前に広がる世界に対峙するとき、それはすでに分節された世界である。コップはコップとして、そのなかの水や、置かれているテーブルとは区別されたものとして、明確な輪郭をもって私たちの前に現れてくる。菊池が三つのシリーズにおいて探究しているのは、このような、分節とそれによって形作られる存在の在り方の問題である。

「void」は写真をハーフトーン化し、画面に定着したシリーズだ。漠然とした濃淡で埋め尽くされた画面を見ていると、じきに、影のようなものが浮かび上がってくる。だが、見えた、と思ってその影に眼を凝らしてみると、その姿はかえってぼんやりとして捉えがたくなる。結局それが「何であるのか」は分からない。

ここで表現されているのは、未分化の状態ではない。そこには地から浮かび上がる図らしきものがある。菊池がここで示したのは、そこに貼りつけられるラベルがないのに、分節は存在している、という「輪郭的」なものあり方なのである。

すると、その「輪郭」を生じせしめた根源的な分節とは何なのか、という疑問が出るだろう。それに答えるのが「umbilical」シリーズである。三分割されたパネルが、一点透視図法の周挑戦によって統合されている。バラバラで分節化されたものと未分化なものが二重に表現されている。

そして、その遠近法の消失点におかれるのは、記号的に描かれた水平線上の太陽だ。これによって菊池は、旧約聖書の冒頭に書かれたような天地創造、あるいは卵細胞分裂という二つの根源的分節を象徴化している。

「idea」シリーズにおいては、分節という行為自体がさらに批判的に主題化された。画面上に定着されているのは古代の洞窟画だ。菊池はその上にさらに自分自身で輪郭線を引き、作品とした。洞窟画の線とその上に引かれた菊池の線とを比べてみると、そこにはわずかな差異や選択が存在していることがわかる。

洞窟画の線は、古代の人々が遺した分節行為の痕跡だといえよう。それならば、菊池の行った線の引き直しは、彼らの分節の再分節である。彼は自己言及的に分節行為を意識化することによって、分節体系の読みかえ、ないし書きかえを試みているのだ。彼の作り出した画面を見ると、ふだん見ている世界がわずかに揺さぶられる不安とともに、既存の分節体系からの自由を感じることができる。

亀山裕亮

慶応義塾大学大学院 文学研究科 美学美術史学専攻

修士課程1年